

# 地域で息づく施設をめざして

—ボランティア活動の実践について—

友愛みどり園職員研究集団

## はじめに

国（障がい者制度改革推進会議）が改革の方向性として「地域で暮らす権利の保障とインクルーシブな社会の構築」を示している今日ですが、いまだに障害者施設建設に反対運動が起こる状況も現実には残っています。

障害のある人もない人も共に暮らす地域を創っていくためには、国や自治体の制度改革を進めていかなければなりません、一方で当事者や関係者が積極的に地域に出て、「地域を変えていく」取り組みを行う必要もあります。

友愛みどり園は、設立（10年前）当初から「地域に必要な施設となることを目指す」ことを基本方針の一つとして掲げ、活動してきました。その一つが「ボランティア活動」です。

この活動も10年目を迎え、質的な転換期にさしかかっているように感じています。そこで、この間の取り組みを振り返り、ボランティア活動が「施設にとって」そして「利用者にとって」どのような意味を持つのかを探っていきたいと思います。

## I . ボランティア活動の経過と現状

### 第1期（前史そして発足）

一般的に、障害のある人たちは「ありがとう」と言うことはあっても、本音で「ありがとう！」と感謝される経験は少ないのが現状だと思います。

開設当初（平成14年）、利用者が「自分が認められている、必要とされている事を実感できる」事をねらいとして、利用者個人が得意なこと、興味があることを通して「側楽」取り組みが始まりました。具体的には所属ホームの役割分担です。その成果を仲間の前で報告することで、お礼を言われ、賞賛をあげる経験をしました。この事の積み重ねにより、自然と利用者の笑顔が増え、これまで、人の話に無関心だった利用者も自分の評価については聞き耳をたて、周りの反応に興味を示すようになってきました。この時の充実感や達成感などが、次の「誰かのために」という意識に繋がり、それがボランティア活動の基礎作りとなったと考えられます。

そして、平成15年から、友愛みどり園は「ボランティアをしよう！」のスローガンを掲げ、同年、7月に開始された、八千代市環境美化制度（里親制度）に応募し、コミュニティーセンターの里親になりました。

本格的な地域のためのボランティア活動が始まりましたが、利用者にとっては作業の見通しは立っても、現状を認めてくれる人（第三者）が明確ではない為に、ボランティア活動としての手応えを感じる事が難しく、このことが大きな課題となりました。

このことを踏まえて、ホームの園内ボランティアとして、園内の清掃を行い、施設長に評価してもらおう事や、生産活動のボランティアとして、木工班では保育園の子供達のために遊具を製作し、贈呈式を設定し、寄贈する事を実感してもらいました。イメージする事

が難しかった「誰か（第三者）」が明確になり、集団として評価される機会ができました。また、個人ではボランティア活動を認識することが難しい方も、集団の一員として「側楽」ことを実践する事ができました。

平成 16 年から「ボランティアをしよう！」のスローガンを更に具体化させ「地域で活動する」スタイルを確立することを重点目標に置き、取り組みました。これまでの地域活動を継続し、上記で課題となった「誰かを明確にする」を考慮しながら、ホーム単位、活動単位での活動の幅が広がり始めました。

ホームとしては、園内ボランティアから発展させ、保育園の清掃ボランティアの活動を始め、生産活動では農園芸班が幼児グループを園の畑に招いて芋堀会を行いました。具体的な内容は、保育園では園児がお昼寝の時間に清掃活動を行う事と、芋堀大会では幼児と一緒に作業することです。この 2 つの活動で共通する点は、「子ども達のために」と目標を明確にした事です。しかし、継続的に活動を行っていくうちに 2 つ活動に変化が見られました。

保育園の清掃ボランティアは子供達が眠っているために直接向き合うことが出来ません。目的が明確なだけに、当初は、「子供達が生活しやすいように」と意識しながら頑張りましたが、結果としては上記の課題が残り、活動意欲が低下していき、2 年弱で活動が終わってしまいました。

一方、芋堀大会は利用者が子供達と直接、接することで、利用者の子供達に対する姿勢が自然と優しく柔らかくなっていき、子供達に頼られることで、いつも以上に頑張る姿を見せてくれる利用者の姿がありました。この活動は年に 1 度の行事でしたが、7 年間、継続しました（残念ながら相手側が廃園となり、昨年度で終わりとなりました）。

この事から、現段階の利用者にとっては「誰か」をイメージしながら活動することより、相手と直接的に触れ合うことで、手応え、充実感等を実感し、自分の必要性を感じてもらうことが大切なのではないかと考えました。このことが、ボランティアに対する責任感や意欲に繋がってくると考えます。

## 第 2 期（拡大期）

平成 19 年頃から地域の中のボランティア活動が活発になり、「地域の人と関わる」ことを視点におき、これまで以上の頻度で実施するようになりました。

具体的には、ホーム単位で里親制度に登録し、駅の花壇整備を行うことや、八千代市のシンボルとなる新川清掃を行いました。当初は、活動をしながら、こちらから地域の方に「こんにちは」等の挨拶を交わしていききました。1 年程度、継続して活動していくと、「今度は何を植えるの」「ゴミ拾い、頑張ってるね」等と地域の方から声を掛けてくれるようになりました。この言葉が利用者の励みとなり、声を掛けられると張り切って作業する利用者の姿が多く見られるようになってきました。また、「地域の方と一緒に花を植える」イベント等も実施しました。地域の方と直接、触れ合うことにで、利用者の「誰かのために」は具体的に明確になりボランティア活動に対する意識（自主性・自発性）は高まっていきました。（※注 1）

園では毎年、ホーム方針を立ており、利用者から『今年は「地域に笑顔を咲かせましょう」に決まったの』と嬉しそうに報告してくれた姿が印象的でした。これは地域の人に期待される気持ちに答えようとする利用者の気持ちの現れになったのではないかと考えます。

この他の活動内容としては、公園の里親、近隣の清掃活動、老人ホームにお花を育てて届ける事を実施しています。このことで、地域の中でも、「友愛みどり園」の名が少しずつではありますが知られるようになってきました。

### 第3期（次へのステップ）

平成 23 年から地域ボランティアの取り組みに変化が見られました。これまでのさまざまな取り組みの成果を生かし、地域の中で、本当にボランティアを必要としている所で責任をもってボランティア活動を行うチームを結成しました。対象者も目的を明確に意識でき、自主的、自発的に活動できる人に限定しました。

具体的な内容は新設の小学校の窓拭きです。学校から依頼を受けて、対象となる利用者に誘いを掛けていきました。選抜されたメンバーは 3 名で、実際に活動場所で内容確認をした後に再度、ボランティア活動に対する意思確認をして決定しました。現在、週 1 回のペースで活動しています。現段階では選抜された誇りを持ち、作業への責任感、技術向上のために自己研鑽に励み、活動に励んでいます。先日は小学校の運動会の来賓として招待されました。来賓として招待された利用者の気持ちはどのように感じたのでしょうか。

今後の課題として、この経験の積み重ねを通して、メンバーがボランティア（無償性・他利）に対する意識を自覚し、自主的に活動の幅を広め、この事が「人としての自信に繋がるため」の取り組みを実践して行きたいと考えます。

**※注 1** 利用者の「自主性、自発性」については園の中で利用者が中心となって活動している自主活動グループがあり、その中で得たことが大きく影響していると考えられます。

### 自主活動を通しての利用者の変化

平成18年、利用者の好きなことを生かして、要望を実現していく活動の 1 つとして、利用者が中心となって喫茶店、「きらら」を運営しています。これは有志の利用者によって、メンバーが結成されており（無償）、運営委員が設置されています。運営委員は定期的にミーティングを開き、仕入れ、販売、売り上げ確認、円滑な運営に向けて等、検討しています（職員のサポートは必要ですが）。

開店当初は、お店屋さんごっこ感覚があったのか、楽しそうに活動している様子も伺えました。しかし時間の経過と共にお昼休みはゆっくり過ごしたい、好きなことをしたいと考える、利用者が出てきました。あくまでも有志の活動なので、本人の気持ちが最優先になりました。昼休みは「ゆっくり過ごしたい」という自分の気持ちと、「喫茶店の活動をしなければ」という「きらら」のメンバーとしての気持ちで葛藤が生まれました。メンバーとしての責任感、義務感、使命感と、自分の正直な気持ちの戦いです。結局、その時は仲間に自分の気持ちを伝え、お休みしました。しかし、その後は、「きらら」の中心メンバーとして意欲的に活動してくれています。ゆっくり過ごしたい気持ちから無償の仕事をするようになった気持ちの変化は何が要因となったのでしょうか。活動の様子から感じることは、日頃から仲間と共に作り上げている活動だからこそ、仲間の中での自分の立場を考え、「仲間から必要とされている」事を実感できたからこそ仕事に意欲的になれるのではないかと思います。

## Ⅱ 「施設にとって」のボランティア活動の意味を考える

一般的に「ボランティア」の定義は、「本人の自由意思」・「無償性」・「公益性」・「先駆性」を要件とする場合が多いようです。友愛みどり園では、個人としてみるとそのような定義を意識的に捉えて活動する事が困難な方が多いのが現状ですが、集団として（施設として）はそのような要件を満たしているのではないかと考えています。ここでは、「施設にとって」のボランティア活動の持つ意味を考えます。

### ① 地域との架け橋となる

当施設は、「地域で・普通の・大人として」の生活の実現を理念にし、地域の中でボランティア活動を、平成 15 年度から行っています。地域に貢献していく事で、地域との『繋がり』ができてきます。街をきれいにすることで、地域の人から「ごくろうさま!」、「いつもありがとう!」といった声を掛けてくれます。それはここで言う『繋がり』のきっかけになると思います。ボランティアだからこそ、施設は地域に実益をもたらし、地域は施設を知ってくれるのだと思います。

実際に、ボランティア活動で見られた地域との架け橋となるエピソードを下記に紹介します。

#### エピソード1

去年の夏は、酷暑に見舞われ雨が少なく花壇の手入れにも苦労しました。一番大変なのは「水あげ」です。ボランティアを行なっている近くには水道がなく、園から重いタンクをいくつも持っていくしかありませんでした。

いつもの様に重いタンクを準備し、水をあげに行くと驚いた事に既に水をまいた後があります。誰かがあげてくれたのだらうと不思議に思っていました。そんな事が何度かありました。どうやら、近所の方が水をまいてくれたと後になってわかりました。

ボランティア活動や、啓蒙活動等を通して施設を知ってもらうことで、障害者に対しての偏見や障害に対して共に考えることにも繋がるように思います。実際に当施設のボランティア活動では、地域の方と一緒に花を植えたり、施設に地域の方を招待したりといった交流に発展しています。一般的な啓蒙活動ではなく、実際の交流を通してこそ「共生（共に生きる）」などの「新しい価値」の創造につながれると思います。

### ②利用者にとっても意味のある活動を提供できる

上記でも記述しましたが、地域の方から「ご苦労様!」「ありがとう!」と声をかけられると、利用者も励みや、やりがいに繋がってきます。ボランティア活動以外でこのような場面を作り出すのはなかなか難しいことです。

#### エピソード2

1年目の花壇づくりは、花壇といっても小さい敷地で少しずつ花壇づくりを行ってきました。花を植えたり、掃除をしたりと徐々に行っていると、「ご苦労さま」、「何を植えているの?」「いつもありがとうね」と、地域の方に声をかけられることが増えてきました。

た。突然、知らない人に声をかけられる事や、いろんな人に言われることで次第に嬉しくなり、より頑張ってゴミを拾う人や積極的に花を植える人がでてきました。

このエピソードでもわかるように、積極的に作業をする方が増えました。以前はやらなかった作業にも、今は自分からやってくれる姿や新しい一面を見せてくれています。地域の方（第3者の評価）からの声掛けや評価が、利用者の意欲に繋がるのではないのでしょうか。ボランティア活動を、意識的に行う事が難しい利用者がある中でも、このような地域との『繋がり』が、利用者で行う活動や施設を挙げて行う活動を意味のあるものとしてくれます。

### Ⅲ．「個人にとって」のボランティア活動の意味を考える

友愛みどり園ホームの一つ「がじゅまる」では「八千代市環境美化里親制度」を利用して、八千代緑が丘駅前の花壇作りを6年間続けています。「環境美化里親制度」とはボランティアが公共の公園や道路などの「里親」となり、自主的な清掃・美化活動を行うというものです。

ボランティアの個人にとっての意味を「がじゅまる」の行うボランティア活動（地域清掃）での、実際のエピソードから探っていきます。

友愛みどり園の利用者は、全体としては障害の重い人が多いのですが、当然一人ひとり「認識力」や「発達の状態」は異なります。しかし、このボランティア活動は「それぞれの状態に応じて」意味のある影響を及ぼしているように思われます。

#### エピソード1

Aさん 46歳 女性 重度

暑い日が続いた夏のことです。緑が丘駅前の花壇には、みんなで種から育てた向日葵などが咲いています。

しかし、数日間雨が降っておらず花たちも元気がありません。このままだと枯れてしまうのではないかとこのほどでした。すると、Aさんは、「花壇に水をあげに行きなさいね！」とみんなに問いかけます。以前は、ただ地域清掃へ行くというような様子でしたが、花壇が心配になり自主的に発した言葉で水をあげに行くことになりました。

ホームではリーダー的存在のAさん、当初は「作業をこなす」という雰囲気でしたが、（これまで報告した）「経過」や「触れ合い」の中で、活動の目的が明確になってきたのだと思います。目的が明確になったことで、「地域の人の為に」や「花壇を綺麗に保つ為に」という思いが更に強くなり、「どうしたらよいか」ということまでも考えられるようになってきていることを示すエピソードだと思います。

#### エピソード2

Bさん 45歳 女性 最重度

当初は、みんなが清掃に行くから「私も行く」といったように、地域清掃においてさほど積極的な態度が見られなかったBさんでした。

しかし、何年か経った頃から、すぐ近くのマンションに住む女性の方も時々作業に参加してくれるようになりました。

Bさんは、「～さん来るかなあ?」「～さんに会いたいね!」とその近所の方に会えることをとても楽しみにしています。実際、一緒に作業するとなると、良い所を見せようとかむしやりに働きます。「近所の方に会いたい!」「喜ばせたい!」という気持ちが、活動の源泉になっているようです。

このエピソードは、実際の活動を通して地域の人と知り合いとなり、それがテコとなり「また会いたい」や「喜ばせたい」ということがBさんのボランティア活動の「目的」になってきていること窺わせます。またそのことにより作業への意欲もあがってきています。仮に「公益性」などの意義を認識することは難しくても、実際のこのような交流を通して結果的に（地域と個人両者に）「益」をもたらすことになるのではないのでしょうか。

### エピソード3

Cさん 47歳 男性 最重度

普段園内の清掃を行なう際、清掃用具を渡すと投げ飛ばしてしまい、座り込んで掃除することへ拒否が見られるAさん。ところが緑が丘の駅前に行くとき一変!ほうきとちりとりを自分から持ち「オー!」と言って、花壇周りのゴミを集めてくれます。

普段では積極的に何か行う姿が見られづらいAさんですが、地域清掃へ行くと「ボランティア意識に燃える」仲間が頑張っている雰囲気巻き込まれるかのように、自分から張り切って作業する姿が見られます。Aさんにとってのボランティア活動ならではの变化と言えるのではないのでしょうか。

ボランティア活動を行うことで、第三者（地域の人）から感謝の言葉をかけてもらい、それが「誰かの為に」という自発性・利他性・無償性につながっていきます。そして「もっと」という意欲となり「技術の獲得」までに発展することもあります。

言葉を変えれば、それぞれの自己実現に寄与できる要素をたくさん持った活動といえると思います。各人によって「目的」は様々であるにせよ、個人にとってのボランティア活動の意味はそこにあるのではないのでしょうか。

## まとめ

現代においては、営利を目的としている株式会社等の企業もボランティア活動（社会貢献活動とも呼んでいる）を展開することが要請されています。例えば、NTT西日本のホームページを見ると「“企業も社会の一員である”というスローガンのもと『良き企業市民』としていかに社会と共生していくか。地域と一体となって社会貢献活動に積極的に参加し、継続的に実施していくこと。その活動を通じて、ともに感動し、ともに成長しながら、より良い未来を創造すること。こうした社会貢献活動こそ、『良き企業市民』が果たす役割」と書かれています。

これらは、営利一本やりへの批判や反省を基にしたものであるにせよ、これからの社会のあり方の一つを示していると思います。

最近出版された暉峻淑子の「助けあう豊かさ」には、「助けあうことは、人間の本性であり、喜びなのです。市場でさえも本来は人びとが必要なものを交換しあう、支えあい補いあう行為のひとつだったのです。」とあり、助けあうことの出来る社会こそ豊かなのだ

